今年度のいもち病防除は嵐剤に頼らない体系で行います

昨年、嵐剤に耐性のあるいもち病菌の発生が確認されたため、秋田県の防除基準でも嵐剤を含む薬剤は使用禁止となりました。今年は育苗期防除に特に重点を置き、いもち病菌を本田に持ち込ませないようにします。

●耕種的防除

乾燥状態で冬を越した稲わら・籾殻は育苗期のいもち病の一番の発生源になります。育苗ハウスの周辺やハウス内に伝染源となる稲わら・籾殻を置かないようにし清潔な環境で育苗管理を行いましょう。また、ハウスでの通風不良、日照不足、被覆期間の過剰、過度の厚撒きは発病を招きやすいので注意が必要です。

●苗いもち防除と箱処理剤を組み合わせて葉いもちの発生を抑えましょう

今使用できる箱処理剤は「本田葉いもちの予防効果」しかありません。育苗期に箱処理剤を散布しても苗いもちを抑えることができず、結果としていもち病を本田に持ち込むことになってしまいます。このため、ベンレート水和剤かビームゾルを必ず散布し苗いもちを防除し、箱処理剤で本田の葉いもちを予防します。

箱処理剤は剤によって使用時期が異なります、使用時期を誤ると薬害や効果不足を招きますので下表を参考に自分の作業体系に合った剤を選択します。

●今年度のいもち病防除体系

苗いもち防除
※どちらかを必ず実施

ベンレート水和剤	どちらか	ビームゾル
500倍液　500ml／箱	必須！	500倍液　500ml／箱
播種時～播種7日後までに使用		緑化始期(ベタ張り除去後)に使用

箱処理剤
※いづれかを使用

床土混和～播種同時専用	床土混和～移植当日	緑化期～移植当日	移植3日前～移植当日
ファーストオリゼフェルテラ粒剤	ルーチンアドスピノ箱粒剤	Dr.オリゼフェルテラ粒剤	Dr.オリゼフェルテラグレータム箱粒剤
	ツインターボ箱粒剤		デジタルメガフレア箱粒剤
	ルーチンパンチ箱粒剤		

箱処理剤を使用しない場合はコープガードD12や側条オリゼメートなどのペースト混和剤を使用するか本田でのオリゼメート剤の散布が必要となります。

育苗期の苗いもち防除と箱処理剤を組み合わせることで本田の葉いもちの発生を抑えることができます。結果として穂いもちの発生が少なくなり追加防除を減らすことができます。

●苗立ち枯れ病予防

ピシウム菌によるムレ苗の対策として床土に焼土や人工培土を使用しましょう。使用しない場合は立枯病予防剤を必ず使用します。

表．立枯病予防剤の一例

使用時期	農薬名	使用量、希釈倍率	散布量（箱当たり）
床土混和	タチガレエースM粉剤	6～8g／箱	－
	オラクル粉剤	10～15g／箱	
播種時	タチガレエースM液剤	1000倍	500ml
		2000倍	1000ml
	オラクル顆粒水和剤	4000倍	500ml
		8000倍	1000ml
播種後	タチガレエースM液剤	500倍	500ml
		1000倍	
	ランマンフロアブル	1000倍	

No. 1
農業技術情報
安心のネットワーク NOSAI仙北
平成28年３月発行
監修：仙北地域振興局農林部農業振興普及課
JA秋田おばこ

良食味米安定生産のスタートは「健苗作り」から始まります

今冬は、暖冬に推移し 例年に比べて積雪量が少なく雪解けも早まりました。気象庁発表の３ヶ月予報では４月、５月の気温は平年並か高い確率がともに40%と予報されています。昨年は高温による苗ヤケやもみ枯れ細菌病の発生が散見されました。良食味米安定生産の取組みは健康で丈夫な苗を作ることから始まります。これから始まる春作業に向けて計画的に作業を進めるため万全を期して下さい。

・まずは作業場内の環境衛生から

作業場内にある稲わら、籾殻、粉じんなどには病原菌が付着している可能性がありいもち病やばか苗病の感染源になってしまいます。作業に取りかかる前に作業場内の衛生管理の徹底を図ります。

① 周辺からのばか苗病の感染を防ぐため、種子予措を行う作業場内の掃除を行い、感染源となる稲わら、籾殻、粉じん等を取り除きます。
② 配布された種子は清潔なパレットの上に置き品種や消毒方法の違う種子を一緒に置かないようにします。
③ 種子予措、育苗作業に使用する器具や容器は使用する前に洗浄し、汚れなどを落とします。また、前年度ばか苗病や籾枯細菌病が発生した方は、容器や育苗箱に病原菌が付着している可能性がありますので洗浄と同時に器具の消毒を行います。（消毒資材：イチバン500～1,000倍で使用）
④ 浸種に使う水は水道水か井戸水を使用します。
⑤ 複数の品種や消毒方法の違う種子を同じ容器で浸種、催芽しないでください。
⑥ 周辺からの病原菌の侵入を防ぐ為、浸種、催芽時は容器にフタをします。
⑦ 浸種、催芽で使用する器具や容器は品種や消毒方法が変わるごとに十分に洗浄します。

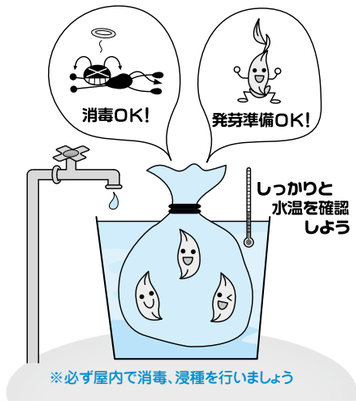
安心のネットワーク NOSAI仙北から
園芸施設共済　春の嵐に備えて 水稲育苗ハウスご加入を！

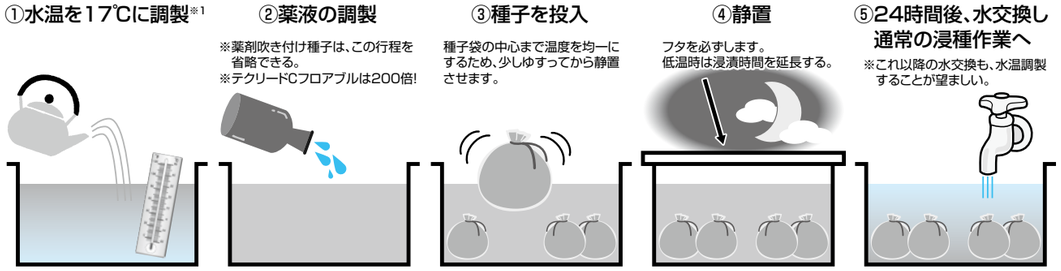
なんといっても安心が一番！
例）3間×10間（30坪）の水稲育苗ハウス
補償金額　178,000円
掛金はわずか　1,031円（2ヶ月）
※詳しくはNOSAI仙北まで　TEL 0187-63-1066

浸種と催芽は温度に注意しましょう

薬剤を効かせるために

薬剤吹付種子は水に漬けて溶け出した薬剤を種籾が吸収することで初めて消毒効果が出ます。水温が10℃以下の場合は薬剤の効果が低下しますので浸種時の水温は10～15℃を目安に行いましょう。はじめにお湯を使い水温を17℃程にしてから浸種を始めると薬剤の効果が安定します。浸種後袋をゆすって、薬液が全体にいきわたるようにします。





※1 種子を投入した際に水温が適温まで下がることを狙って、最初に少し高めの水温に調製します。

※ヘルシード剤、テクリード剤ともに浸種水温10℃以下では薬剤効果が不十分になったり生育抑制につながる場合があります。

水の量は種子１kgに対し水3.5ℓ程とし浸種開始から２日間は水の交換は行わず、一回目の水交換後、２～３日おきに水の交換を行いましょう。浸種期間は浸種水温10度の場合で６～10日程度とし、水交換時には必ず籾の状態を確認し、籾袋を上下入れ替えるなどして均等に吸水させるようにします。

浸種時にしっかりと籾に吸水させてやることで、そろった芽出しにつながります。十分に吸水をした籾は胚が白く透けて見えるようになり、浸種終了の目安となります。

無消毒種子を消毒する場合は効果の高いテクリードＣフロアブルを使用しましょう。その場合は初めの浸種水温を必ず17℃程度にしてから種籾をつけるようにしてください。

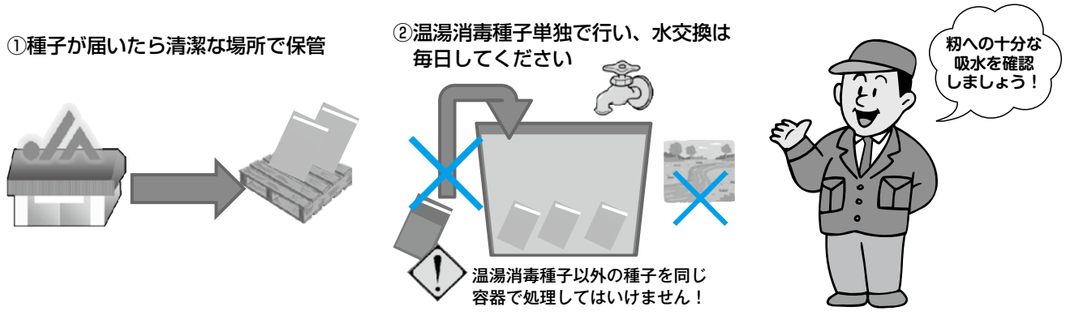
温湯消毒種子の注意点

温湯消毒種子はお湯により殺菌が終了した無菌状態の種子なので、浸種後も清潔な環境に保つことが重要です。

① 河川水などは雑菌等がいるため、浸種、催芽に使用する水は水道水か井戸水を使い、水の量は種子量の２倍以上で行いましょう。また消毒方法が違う種子を同じ容器で浸種しないでください。

② 呼吸活動が活発なため、水は毎日交換し、水循環は病原菌の増殖を助長させるため絶対に行わないでください。また、浸種水温は10～15℃の範囲で行います。

③ 芽の動きが早い傾向にあるため籾をよく確認します。

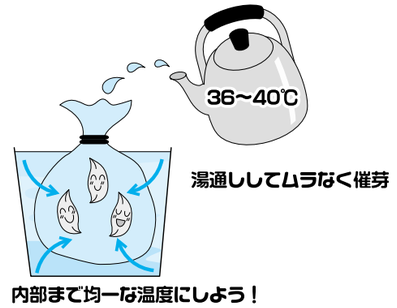


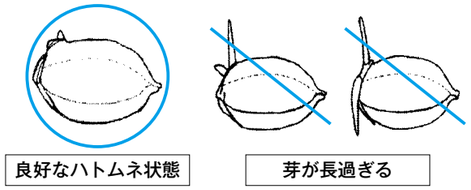
催芽はていねいに

催芽時には36～40℃のお湯で湯通しを行い、種子袋の内部まで均一な温度になるようにしましょう。その後、水温30℃で催芽を行います。水温が32℃を超えるともみ枯細菌病などの病気にかかる危険性が高まりますので必ず水温は確認します。

温湯消毒種子を使用する場合は、催芽時にタフブロック剤を使用し防除効果を高めます。

芽の長さはハト胸程度を目安とします。催芽時に芽を伸ばしすぎると播種作業などで損傷が多くなり、播種量のばらつきや播きムラ、苗ぞろいの不均一の原因となってしまうので注意します。





プール育苗に取り組まれる方へ

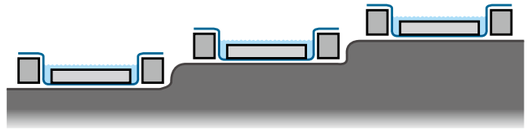
プール育苗は育苗ハウスにビニールシートなどでプールを作り苗が緑化期後１葉以上に生長したらプールに水を入れて管理する育苗方法です。プール育苗を行うことにより水管理や温度管理作業が大幅に短縮されるので、日中の管理が難しい方などにオススメです。また、もみ枯細菌病や苗立枯細菌病の発病を抑制することができ健苗育成に役立ちます。

準　備

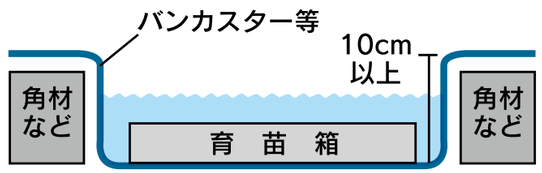
プール育苗を行うハウス内をできるだけ水平にして足跡がつかないように鎮圧します。育苗ハウスの傾斜が大きい場合はプールを数段に区切るなどして置き床を水平にします。

置き床の幅は育苗箱を並べる幅より５～10cm程度広くし周囲は土や角材等で８～10cm程度高くし枠としましょう、プールには水の漏れないビニール（ブルーシート、バンカスター等）を使用します。

根が伸びやすいため育苗箱の下に敷き紙をしき、根が貫通しないようにしましょう。また、プール内に育苗箱を並べる際は発泡スチロール等の上に乗りながら作業をするなどしてビニールを傷つけないように注意します。



●育苗ハウス内全体を水平に出来ない場合はハウスを細かく区切りながら敷物に合わせた水平な置き場を作ります。（例：1.5間～2間×3間の穴の開いていないビニールシートを準備しその部分を水平にする）。



●ハウス内をできるだけ水平にならした後に、ビニールシート（バンカスター可）を敷き、育苗箱の周囲を土または角材等で押さえてプールを作ります。高さは10cm以上が理想。

ほ場の準備

昨年の作業の影響により田面に凸凹のあるほ場では、雪解け時に高低差を確認し田面を均平にしましょう。雪が残っているところは高くなっているので切土します。また、水が溜まっている所は低くなっているので盛土しましょう。

ほ場の高低差を少なくすると耕起や代かきが均一になります。田面が均一になることで肥料の効果が安定し生育が均一になります。また、除草剤の効果が安定し、雑草を抑えることができ、養分競合や斑点米カメムシ類の被害を抑えることにつながります。